慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	The New Radicalism in America, 1889-1963 : The Intellectual as a Social Type. By Christopher Lasch. : 349pp. New York : Alfred A. Knopf, 1965, $ 6.95.
Sub Title	
Author	加藤, 弘和(Kato, Hirokazu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.22, (1966. 11) ,p.62(42)- 65(39)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00220001-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

The New Radicalism in America, 1889—1963 : The Intellectual as a Social Type. By Christopher Lasch.

349 pp. New York : Alfred A. Knopf, 1965, $ 6. 95.

加藤弘和

ここ数年，アメリカの社会は特にはげしく動いているように思われる。LSD が流行し，"happening" とよばれるものが舞台にのり，美術の方面で新しい動きがつぎつぎに展開していくのは，そのあらわれであろう。宗教界では，「神は死んだのか」という論題をめぐって，さかんに議論がなされている。教育界でも学界でも，これからの方向を模索しているようだ。自動車を安全にしようとあれほどさわいでいるのも，アメリカ文明が，我々の想像以上にすすんでいる証拠ではないかという気がする。

上のような動きに関心をもっている私は，本書がでた時に，とびついた。実をいうとタイトル，*New Radicalism in America* だけをみて，"new" は "contemporary" を意味するのだろうと漠然と考えたからである。しかし，著者のいう "new radicalism" は，Mill や Marx の "old radicalism" にたいするものである。また，本書であつかわれる期間は 19 世紀末から 1960 年代はじめまでとなっているが，1940 年代以後は最後の一節であつかわれているにすぎない。こういうわけで，私の期待——それは見当違いのものであったが——は，うらぎられた。しかし，著者の考え方，問題にとりくむ態度はそれにこたえてくれるものであり，興味深い労作というのが本書の読後感である。

著者は，副題がしめすように，新ラディカリズムをインテリの社会史の一面としてとらえていく。それは，その抬頭と，インテリが一つの社会のタイプとして無視できなくなったのと，期を一にするからである。

19 世紀後半のアメリカにおいては，大部分の人間が中流階級にぞくしていた。そのため階級意識は弱く，地方・地域的意識が強かった。(Riesman などは，人種的・民族的意識が強いことを重視するが，本書ではこの点はほとんど考慮されていない。) そういう社会においては，インテリが互に連帯感をもつことはなかったといっていい。ところが，中央集権化がすすみ，大企業がのびて，伝統的共同社会・家庭が崩壊してくると，実社会とのあいだに距離をおいて批判的立場にたつインテリの存在は顕著なものになった。その後，インテリは，次第に大衆とエリートの対立

という問題をひきおこすほどに勢力をのばし，ケネディ政権の確立とともに，特権的階級になった。この過程を，20世紀における若者の反抗の特色，進歩的教育論，知性と科学の重要性をといた人々，教育と政治の結びつき，インテリ自身の権力へのあこがれなどを説明しながら，本書はたどっている。

しかし，本書の主題が，新ラディカリズムであることはいうまでもない。少しくわしく，著者の研究をたどってみよう。

新ラディカリズムは，狭義の政治にではなく，教育・文化・性の問題に関心をもち，社会・政治上の改革の目的をアメリカ文化全体の質の向上においた。自己の問題から出発して，インテリが社会ののけもの的存在に共感し，政治的手段により社会的，心理的にしいたげられたものを解放しようとしたこと，人生を実験とみなし熱心に経験をもとめたことが，その特色である。

このような特色がでてくるのは，社会的変化にインテリが敏感に反応したことを意味する。教育，中流階級の生活が現実生活から遊離し，無意味，退屈で偽善的要素をもつことにたえられなかったのが，ラディカルである。その結果，あるものはアングロ・サクソン文化，さらには白人の文化をも，否定した。世代間のギャップに注目し，子供を抑圧されてないよりすぐれた存在と考え，かくれた自己の再発見，開発をめざして，教育の改善に努力した。フェミニズムのはげしい議論のそこにも，余暇をもてあましながら因襲にしばられている女性の不満，活動的な男性への嫉妬があった。J. L. Steffens は中流階級の悪を直視しない態度を非難し，黒幕的存在に共鳴した。

社会，世界状勢の変化につれて，新ラディカリズムの問題とする点も推移し，ラディカル自身の間でも相互批判がおこなわれた。しかし，新ラディカリズムの欠点，弱点は，まさに上にのべた特色からでてくる。その教育にたいする考えは，結局保守的な目的——人生への適応，市民の教育——につながる。労働者，未開人，移民などを理想化しすぎているし，ラディカル自身が拒絶したものを彼等にあたえようとしている。同情にかけるところがある。中流階級の生活をすてて経験をもとめたが，生そのものにはちかづけなかった。また，行動への渇望，社会のうごきにコミットしたいという気持のために，たとえば，*The New Republic* の編集者達が第一次世界大戦にぶつかったときのように，確固とした方針，主義をもちえなかった。政治と文化とを混同したために，愛と美の領域でもとめるべき満足を，権力の領域でもとめる傾向がでてきた。これらの弱点，欠点の指摘は本書では重要な意味をもつ。

著者は，自叙伝，手紙をもとにし，伝記的事実をおおくとりあげながら，ラディカルの特色，欠点を指摘していく。この方法をとるのは，社会学に幅，深みをもたせたかったからでもあるが，新ラディカリズムが個人の内省とふかくむすびついているからである。非常に主観的，個人的問題からでているものを，社会的な問題とみなす，あるいは，一時的なものを究極的なものと混同する危険性をさけるためで

ある。この方法は，Richard Hofstadter から著者はまなんだといってもいいが，アメリカ現代史再評価の動きのとる方法でもある。

著者によるラディカリズムの定義は，そもそも非常に広義であって，その他のイズムとの関係は，あいまいである。単純化していえば，20世紀はじには，インテリは，liberalism, progressivism, socialism のいずれを信奉しようと，ほとんどみなラディカルであった。ラディカリズムは視点の問題であって，政治上のラベルは問題にならないからである。しかし，第一次大戦後には，リベラリズムとラディカリズムとは，はっきりちがった方向をとりだした。マルクス主義者の多くは，ラディカリズムの特色をもっている。だが，ちがっているとはいえ，共通点があり，転向が比較的自由におこなわれた。第二次世界大戦後についていえば，「コミットメント」派にぞくするのがリベラルであり，「疎外」派がラディカルであると著者は考える。だが，この場合にも，本質的には両者はあまりちがわず，ともに世間的名声を獲得した。たとえば，Norman Mailer は，ラディカルであるが，エスタブリッシュメントにふかく足をつっこんでいる。この点を著者は批判する。

本書でとりあげられる人々は多い。そのなかには，いわゆる代表的人物ではないものもふくまれているが，著者の意図ははっきりしている。ある人々については人間性に本来そなわっているもの，他の人々については社会状況に深くねざしたものを説明していく。しかし，完全に無視されている重要な人物・事件が多いこと，本書の三分の二以上が，第一次世界大戦以前のことでしめられ，1930年代，40年代の考察が特にたりないことは，私には不満である。さらに，現代をあつかう最後の節では，現象面から独断的に結論をくだしていく傾向がつよい。それらの結論は，それまでにとった方法によったことを，読者は理解しなくてはならないのかもしれないが，ともかく，この節が全体からういていることは否めない。

本書の最大の魅力は，最後の節を除いた部分における，客観的に冷静であろうとする著者のするどい分析，観察にある。新ラディカリズムの欠点，弱点を容赦なく指摘し，いくつかの場合には，伝記的，歴史的解釈の甘さ，誤りを訂正した。これが本書の最大の成果である。最後の節では，現代アメリカ社会を痛烈に批判しているが，単なる批判にとどまっている。いくつかの例をあげてみよう。ニュー・フロンティアがかなでるしらべは，ブロードウエイとハリウッドのかなでるものと同じになってしまった。インテリは，彼等の自画像をたてまつるために，ケネディをたてまつり，文化という概念を堕落させてしまった。アメリカ外交政策は柔軟性にかけ，古くからある搾取の政策にすぎないとはっきりいいきり，アジア，アフリカ，ラテン・アメリカの研究がたりないことも指摘する。これらの批判は，著者の勇気，客観性をしめすものではなく，1960年以後の時代を反映するものであると私は考える。

著者 Lasch は，1932年ネブラスカに生まれ，ハーヴァードとコロンビアでまなび，現在アイオア州立大学の助教授である。Hofstadter は，彼は新しい世代の代表

的社会批評家になるだろうというが，それはともかく，彼が20世紀アメリカ史を客観的にみ，そこから多くをまなびとろうとしていることは，評価していい。現代アメリカにおいては，共産主義か資本主義かの選択はもはや重要ではないとし，現実からかけはなれた神話的存在となったイズムを信奉する盲目を批判する傾向がつよくなっている。Lasch もその傾向をもつ一人だ。すべてに批判的，現実的であろうとし，冷静に分析と観察をつづけなければならないという。D. Macdonald は，共産主義にも資本主義にも絶望したが，それは早急すぎたと批判する。スターリン治下のソ連では，彼自身の個性が大きな力をふるっていた。それを体制の欠点と早合点してはならなかった。共産主義は，後進国がたどる一つの段階として意味をもつのであり，アメリカを "open society"，ソ連を "closed society" とよぶのは，まちがっている。こういうことに気づき，指摘できる時期になったのだ。

ラディカル達は，各世代とも前の世代よりもタフでイリュージョンをもたないと主張してきたが，新ラディカリズムの最大の特色——文化的改革は政治的行動をとおしてなされうるという仮定は，常にその根本にあった。Mailer も例外ではない。しかも，彼のアメリカ文化・生活をゆたかにしようとする努力は，自己の芸術をまずしくすることに終ったと著者は考える。結局，インテリがその本来の役割をわすれ，知性を軽視したことに新ラディカリズムの最大の欠点があるのではないか。これが，本書の出発点となった疑問であろう。

L. Trilling は，Riesman の社会学の業績を評して，小説が果すべきことを，小説以上にうまくやってのけているといったが，本書もそういう面白さをもつ時がある。Steffens の節では，そうとう彼の内面につっこんでいっているし，Jane Addams の心理状態を説明する時には，De Quincey, Henry James を引用したりしている。1889年は，彼女が Hull-House をひらいた年である。